佐藤溪峰著

百笑珍話無理問答

發行所　弘運館

264
220

091852-000-8

特49-233

百笑珍話無理問答

佐藤溪峰／著

M43

DBO-0371

一讀萬金ノ價アル

◉職業之巻◉

本書ノ發行セラルヽヤ薄資本者ニ歡迎セラルル事恰モ盛夏ニ雲霓ヲ望ムガ如ク出版以來非常ナル好評ニテ已ニ數千部ヲ賣盡セリ本書ヲ購入セラレタル人ニテ從來徒手無職ニ困難セラレシ人モ今ハ已ニ一定ノ定舗ヲ備ヘ堂々ト本書内容ノ商品ヲ製造シツヽ日毎ニ隆昌ニ趣クヲ以テ厚ク禮ヲ述ベラルヽ人又ハ單身行商ヲ爲シテ生計ヲ立テラルヽ人等數ヘ來レバ應接イトマナキ程デ斯ル珍書ノ出タルハ出版界空前絶後ノ事ト云フベキナリ諸君速ニ買イ玉ヘ今左ニ掲載概目ヲ記セバ

○人造氷ノ製法○葛澱粉類製造○精練漂白法各種○染料製造並ニ染色法○古物色揚模様拔法○象牙大理石木材各種着色法○紙類製法松葉ニテ製紙ワラ紙製法○水記萬年草紙○萬年手帳○磨紙○紙製ハンカチフ○簡易紙皮○紙石盤○紙ヲ以テ氷嚢、枕、座布團製造○文明複寫紙○木材ヘ無刀ニテ彫刻スル法○各種墨類製法○各種インキ製法附コム印用インキ○ガラス用インキタイプライター並ニ印刷用インキ製法○印肉各種塗料製法○人造象牙、珊瑚、大理石及人造石ノ製法○各種白粉化粧品製法○鋼器ノ錆ヲ落ス法○鞣皮製法○各種製版ゴム印製造術○最新式藥品金銀鍍金術○寫眞法○石鹼化粧品製法○萬能のり製法○其他數種並ニ不景氣利用法○薄資運用法○地方田舍ノ有望事業○利殖統計表○商家ノ金科玉條數件一讀悠然トシテ骨肉躍ルノ大奮發ヲ起ス實ニ文明商人必備ノ座右銘タルヲ疑マセン右ノ内尤モ利益多キ藥品金銀鍍金術水記萬年草紙萬能のり手帳ノ如キハ本書ヲ一讀アレバ行商地ニ於テ夜間製造シ得ラルヲ以テ一冊三十錢トハ法外ニ安イ本デス

◉帝國ノ新聞王時事新報曰ク薄資ニテ從事シ得ベキ殖産工業ニ關スル諸般ノ製法數十種ヲ簡單ニ記述セルモノニテ商人ノ必讀スベキ珍書ト稱賛セリ

三重縣四日市市新丁

發行所　弘運館

（振替口座大阪七六七三）

郵便切手ナレバ送賃共參拾五錢

定價參拾錢　郵稅貳錢

序

凡ソ人類ニハ娯樂ガナクテハ一日モ愉快ニ暮ス事ガ出來ナイモノデスガ娯樂ニモ色々アツテ野外ノ散歩各種ノ遊戯モ面白イガ又多人數集マツテ面白イ話ヲスルノモ中々愉快ナモノデスソコデ著者ハ十數年間ノ經驗ヤ其間ニ見聞シタル面白イ事ヲ茲ニ集メテ名ツケテ百笑珍話無理問答トシタノデス夏ノ涼シキ夕一家團欒ノ襟又ハ冬ノ寒キ日ストーブノ傍ニ知己朋友ト共ニ本書ヲ繙カレテ一座ノ興ヲ添ヘラレタナラバ著者ノ光榮之ニ過キタルモノナシ諸氏幸ニ愛顧ヲ垂レ給ハン事ヲ

著者しるす

交内
43. 8. 8

◎上京珍話

昔田舍の人が用件があつて京都へ行く事となりました村中の人は皆村端れまで送つて來て其行を祝しました其中に一人の人が云いますには上方は余程開けて居ますし中々上品ですから何か目新しい事や面白い事があつたら必ず何かへ控へて來るがよろしいと申しましたそこで一同の人に別れを告て日ならず京都へ着ましたから早速宿を求めて此處へ宿る事になり二階へ上て一服して居りますと宿屋の主人が挨拶に來まして云いますには御國は何處で何日御上京遊ばされましたと尋ねましたそこで客が國は備前だが上京とは何の事ですと不思儀そーに尋ねました宿屋の主人は面阿しくあるが笑ふ事も出來ず上京とは田舍から京都へ御出になる事を、當地では上京と申しますと云いました客は成程と合點して村出立の折聞いた通り手帳へ附ました其日は別に變つた事もなく一夜を明かし翌日自分の用件を濟しに行きまして愈々歸る事となりましたら先方の人が云いますには何日頃御歸國

ですと尋ねましたソーラ又六ヶ敷事を云いだした其歸國と仰しやるのは私しに一寸分りませんが何の事ですと尋ねました並び居る店の人たちは隅の方でくす〳〵笑て居りますが主人公は笑ふに笑われず眞面目(マヂメ)になつてハー歸國とは國へ御歸りの事だと答へました聞いて見ればナール程早速其通り手帳へ控へましたそれから其家を出て宿屋へ歸りまして翌る日宿屋の主人が案内で見物に出掛ました先づ七條河原へやつて來ました所が澤山の首が曝ししてあります客「アノ首は何です」客「アレハ獄門と云ふ物で罪人(トガニン)の首です」と答へました田舍者は早速其樣に手帳に附けました夫れから段々やつて來ると伏見の稻荷さんへ來ました社の入口に石の柱が立て居りますから是は何かと尋ねましたら之はポン〳〵と云ふ者で杖で打てば其の名の加くポン〳〵と云ふからだと云ひました又向ふに赤く見ゆるのはあれは即ち有名な稻荷の鳥居ですと云いました田舍者は不思議顏に上方では石の事をポン〳〵と云い赤いものを稻荷の鳥居と云ふと手帳へ扣へました夫れから色々變つた所を見て宿へ歸りまして二階から下の賑かなのを見て居りますと物貰いが御家繁昌〳〵と云ふてやつて來る又分らないから宿屋の主人を招んであれは何の事かと尋ねました當地は皆物貰いはあの樣に御家繁昌〳〵と云て來ますと答へました客は上方では物を貰ふのに御家繁昌〳〵と云ふと手帳へ扣へましたそこで大分見物もしたし今日は歸ろと思ふて愈々歸國しました村へ歸つて帳面を調べて見ますと次の樣な事が扣へてあります

京都上りをする事を
人間の首を
元の村へ歸る事を
石の事を
赤い者を
物を貰ふ事を

上獄門
歸國
ポン〳〵
稻荷の鳥居
御家繁昌〳〵

それからと云ふ者は暇ある毎に手帳を出して上方言葉の稽古をして居ました或日裏の柿の木へ上りまして柿を取て居ましたらドー云ふはづみか手を放して柿の木から落ちまして下の石で頭を打ち血が出で中々止まりません早速醫者を迎へにやるのに醫者は大抵學者だから今度は一ッ上方言葉で上品に書て醫者を驚かしてやろーと思い早速下の樣な手紙を認め下女を使いにやりました醫者は手紙を開いて見ますと何だか薩張(サッパリ)分らない

醫「ウーなんだ

私儀柿の木へ上京致し過ちて歸國致し木の下のポン〳〵にて獄門を打ち稻荷の鳥居容易止まらず至急に藥を御家繁昌〳〵

醫者は何事か分らず何でも只事でないと思い早速駈附て見ると右樣の次第大笑いとなつたそうです只今漢語や英語が流行しますが成可皆さん六ケ敷人に分らん樣な事は書かない方がよろしい

◎狸の睾(キン)丸(タマ)

狸の睾丸八疊敷の解

之は昔佐渡の國から德川將軍へ献上した金の玉に七子の模樣があッた是は當時非常な貴とひもので價にすると八千兩と云ふ話しであつた此の話を間違へて狸の睾丸八疊敷と云ふことになつたのだほんとは七子の金玉八千兩と云ふのである

◎金儲の相談

甲「ナント君專賣局は馬鹿に煙草で儲けるじやないか僕等も一ッ安く造ッて數島を五錢位で賣出そうじやないか必と儲かるに違いない此間話しを聞たら敷島一ッが貳錢一厘位で出來るそうな 乙「そいつは面白い近頃の名案じや早速に掛ろうダが君原料は何處で買ふのだ 甲「無論サ原料は煙草專賣局サ……

◎離緣狀

甲「君僕が此間結婚した妻だがねあれがその一寸氣に入らん所があるので離緣し

たいと思ふのだが昔から離縁狀は三行半と云ふ事を聞いて居るが一体どう書くのかちよいと敎へて呉ませんか物知「宜しい夫は次の樣にかくのです

わたしやた前がまつたく嫌だ
知らぬ昔にしてほしいた前は
ほんとにしんからいやだ馬鹿
で助平で狂人じや

◉棒の種類

棒の内にしわん棒二本棒べら棒たんぼー（トチ）橡面棒カッタイ棒いちばんしまいに泥棒と云ふ棒があるこれは中々性の惡い棒で警察のやつかい棒だシワン棒と二本棒とは是又正反對の行動をとる棒で一方はたしるこ四椀を平らげる方だし一方は酒德利二本を平げる方だ兩方とも自已の名稱の如く酒二本たしるこ四椀より超過すると遂にわべら棒の厄介となる棒だ昔しカッタイ棒が死んだ時たん棒が火を掛て燒こうとしたら溶けられてしまつたからたん棒はびつくりして橡面棒を振つた事があると云ふ話しがある先づ棒の種類はこんな者だ

◉翁と老媼

昔或る所に翁（ぢい）と媼（ばば）とがありまして翁は山へ草刈りに行きました媼は川へ洗濯に行きましたところが川上から大きな薩摩芋が流れて來ましたから媼は早速之を拾いまして家へ持て歸り直に之を蒸して喰いました暫くすると御腹が張て御尻からたならが澤山出ました翁は之を知らずに山でクサかつとさ

◎親と子

昔から親は橙々子は密柑と云ふ事があるが是れは諸君一寸御分りにならんでしようから以下に說明します

抑々此の句の起りは昔相當な家の悴が親と久しく逢づに居たので久方振で親の家へ戻つて見ると親の家が見る影もない憐れな姿になつて居るので子は之を見兼ね

涙を流して嘆いたと云ふ事を云い違にたのだつまり親はと云ふのは小屋はで樅々とは頽廢(タイハイ)の誤り子は密柑と云ふのは子は見兼ねと云ふのだ即ち小屋は頽廢子は見兼ねと云ふのが本當である何と皆さん合點が出來たか

◎小供と巡査

小供が警察へ走り込で來て只今澤山人が裸體(ハダカ)になつてをりますから科料を取てやりなさいと訴へたから巡査は早速行て見ると風呂屋であつた

◎鼠

凸坊「オイ凹坊去年已れが取つた鼠は四貫目あつたぞ凹坊「それは又大きい者を取つたな凸坊「ソレが何匹もでたぞ凹坊「ソーかそんな大きいのが何匹も取れたの……

◎雷

親方「ヤイ軍次かみなりが落ちたと思ふたら辨當を忘れて行きやがつた 軍「親方まそうですか雷や何を喰てるんでしようね 親「マア明けて見るがいゝや 軍「ヤア親方さすがわ雷だヘソのつくだ煮の菜を入てますせ 親「ソーカ夫れは珍しいついでに飯米の替りに何を入れてをるか其の下を明けて見よ」 軍「へい」と今其の下を明けようと思ふて明けに掛ると今迄空から見て居た雷が大聲上て 雷「やいこら明けちやだめだよ臍の下

◎呪(マジナイ)

或る所に呪で俗にミヽゴと云ふ耳の病を治す所があると聞いたから一體呪と云ふ物はどんなことをするかと著者は耳の中へ薩摩芋をねじ込でミヽゴだと云て治して貰いに行た所が先生醫學の素要も何もないから耳の中へ薩摩芋がねじ込である事に一寸も氣が付かない今から呪をして上るからと云ふて僕の耳へ口を當て色々何事かを話したが僕は少しも聞ねんと云て僞を言た所が先生全く聞ねないと思ふたか愈々呪にかゝつた其呪の文句は著者にはちやんと聞えてをる即ち

上野下野(コウヅケシモツケ)信州飛驒山城大和伊賀河内是れ八ヶ國に海はあるまいふーッ……

◎沈香も焚かず屁も放らずの解

これは支那の蜀(ショク)の國の愛妃が非常に狆(チン)を好ませ給ふて常に之を愛して抱いて居られたすると此の狆は屁を放つ抱かずに置けば屁を放たない何程綺麗な狆でも矢張り獣で仕方のないものだそこで抱かなければ臭い屁も放たないと云ふ事が誤り傳へられたので眞とは狆ころ抱かず屁もひらずと云ふのだ

◎理屈と規則

學生が植木を持て汽車に乘ろうとしたら驛夫「貴下汽車の中へ植木を持て入ては不可ませぬ　學「そうかそれじや洋杖の先へ掛て窓から外へ出して行く第二の學生が犬を連れて來て入ろうとした　驛「貴下一枚の切符で動物を連て入ては不可ません　學「こんな少さな犬位かまはないじやろ　驛「何程小さくても動物は連れて入ることが出來ません　學「そうかそれじや自已の體に居る通風子(シラミ)の數を數えて呉れ皆んな切符を買てやる

◎箱入娘

昔しから金持の娘を箱入娘と云ふが此言葉の起りは遊女の反對を云ふた者で遊女は皆前借で抱へられたHから殆んど社界の一過に押込られた樣なもので籠の鳥見たようなものだ此れを昔しは籠入娘と云たものだが大切の娘にも何か風變の名が附たいと云ふ考から箱入娘の名稱を附ける事になつたのだ

◎髪結

甲「オイ君髪結が嫌いなので到々自殺した女があるげなぞ　乙「そうかそれはまあ氣の毒だッたなあ而し外に結ふに云はれぬ理があるのだろう

◎三十日

諸君の内で借りた金を返さん樣な人はなかろうが若し此の後返さんつもりで金を借りるなら二月の月がよろしい此の月は三十日(ミソカ)がないから

◎ウントコドッコイでれすけさん

此の言葉の起りは或る老人が團子を喰たらうと咽喉へ支へてどつこいと詰つた目を白黑にして大騒ぎをすると斯るときに特効ある靈藥がある卽ち手靈助散と云ふ藥だ早速此の手靈助散を飲まして漸く咽喉が通つたと云ふ事から始まつたのだ

◎高い物

日本內地で一番高いものは何んと皆さん考なさる國華と云ふ煙草ですよ何故なれば不二よりも高いから

◎行司

大阪力士がドン〳〵脫走して行くから小角力等是れではとてもやりきれんなと云て居るのを行司が聞てゐ前等は殘ッた〳〵

◎判じ物

八萬三十八三六九三六四九一八二二八九三四六九九二三九八七

解、山里は寒く淋くし一ッ家に庭草白く區々に咲花

◎坊主

高野山は女人禁制の山だから從つて此の山に居る坊さん等も皆眞面目で居る筈だのに中には不身持の人もあつて僕が暫く紀州に居た頃村の寡婦さんの處へ極內々でチョイ〳〵宿りに來る坊さんがあつた處が此所に一匹鷄が飼てあつて朝になると早くからぽづをきよ〳〵〳〵と鳴くから坊さんは內所で來て居るのに早くからぽづをきよと鳴かぎやると思い有合せた棒で鷄を打ちましたら鳥は驚いてゴケートッタ〳〵と云ふて鳴き廻りましたから坊さん早々に其家を出て寺へ歸つて再び來なかつたと云ふことがありました

◎著者の旅行

余が嘗て世界漫遊の途に上つたとき海上で非常な困難に逢遇し或るときは海賊に襲はれ或は黑奴に捕はれ氷山と衝突して本船は破壞せられ三日三晩も食はず飲まずに是を續けた事や斷岸絕壁より千尋の谷へ突落されんとせし事など聞くも恐ろ

しき困難の有様を一通り皆さんにお話ししましよう

私しが一月一日四日市港より滊船に乗つて世界漫遊の途に就た知己朋友は帽子やハンカチを打振て余の行を祝して呉れた余の便乘せる滊船は定刻となつて愈々四日市港を出帆した只見る空莫たる大海原に點々と見ゆるは鴨の群集するのみ無邪氣なる海鳥は本船の滊笛に驚かされて高く空中に舞上り再び下りて海上に浮揚し恰も突堤の如く長く或は圓陣を作り余の行を祝ふが如く又嘲笑るが如く余に一種云ふ可らざる印象を與へた頻て伊勢灣を離れて大平洋に乘出すと今迄晴朗なりし天の一角に黑雲立上り見る〳〵一天を覆い風さへ加り雨はボッ〳〵雹の如く大いなる者が降て來る冬海上の常とて將に暴風雨となつたのだ船は段々と動搖が烈しくなる日は已に西に傾いて海上は次第〳〵に暗黑の帳りに閉された夕食報知の鈴が鳴つても誰も食堂差して行く姿さへ認めぬ正しく午後からの暴風に乘客一同船暈を催して食事をする勇氣がないらしい只さい船に弱い余は到底食事なんか出來

ない海は益々荒れて來る處は遠州灘の沖合平穩なる日さへ小山の如き浪であるのに午後過ぎからの暴風で逆卷く怒濤は船舷を打て宛然百雷の落るが如き勢だ船長は各船員を必死に督して居る僕等の部屋へ事務員らしい人が來て乘客一同に本船の無事を報じて客に安心をさせて居るがろく〳〵答へをする人もない畢丸は胸迄飛上つて一人も人間らしい顏をしている者がない暫くすると大きな浪が上甲板を打越して吾々の室へばさんと入つて來た何のことはない愈よ船が沈沒したかと思ふ位いだ立て居ることも出來ず寢臺を一生懸命に握りしめて横になつて居ると枕元の荷物はどさんがさんと顚覆して落ちて來る向ふの方では南無阿彌陀佛〳〵右の方では天照皇大神宮左の方では金比羅大權現苦しい折の神頼みとは是等を云ふのだろう神樣や佛さんこそ克い面の皮だ平常に御燈明一ッ供へて呉れぬ者迄金比羅大權現やれ伊勢大神宮ソレ南無阿彌陀佛と滅多無性に云い續ける客室の燈火は船の動搖に依て皆消にて仕舞ふ向ふの方ではゲクガーと何やら怪しな者を吐いて

居る僕も何だか胸が苦しいから懐中藥でも取出して飲もうと思い眞黑の中を手探り〳〵探しても頓と藥がない無い筈だ乘込の折細かい者は皆かばんの中へ入れて支舞てあるやつと夫れに氣遣いて腰に下けたる鍵を取出してカバンを明け樣としたがなんぼ鍵を捻じてて明かない僕は懸命に鍵を捻じ廻して居ると「イタイッ」と云ふ者がある何だと云て問い返すと何も糞もあるものか人の尻の穴へ鍵を突込みやがつて人を馬鹿にするも程があるつと怒つて居る僕は誠に濟んと粗忽を謝して其場は納まつた話しを聞いて見ると此客は船の動搖で身躰が大變勞れたのでうと〳〵と眠りかけて居ると恐しい青鬼が出て來て追掛て來るのだそうな余りの恐しさに逃場を失ていたが船橋があるのを見付けて早速駈上たがとう〳〵鬼に追附かれて下から鎗で芋差しに出合うたから思はず大聲で救いを求めた其聲が余り大きかつたものだから自分と目を覺して見たら尻の穴へ鍵を差込で君が廻していたんだこんな恐ろしい事は生れてから始めて見た夢だと云ふてをる僕は面白いやら氣の毒やら笑ふに笑ふにずちつと我慢してカバンの穴を取違た事を話して許て貰た樣な事で殆ど常識を失つて居る位船に暈ていた暫くすると海上はだん〳〵納まつて來て涼しい風が吹いて來る乘客者一同胸撫で下ろした夜が明けると伊豆半島は太平洋に突出して南の方には點々伊豆列島が散在して居る誠に克い風景だ船は横濱について荷物や客の上下ろしをして愈々出帆した途中房州半島を左に見て九十九里濱の荒海を渡り無事で五日間航海して船は丁度今千島へ差掛かろうとしたら濃霧發生の爲め海上危險なる通知に接したから止むを得ず根室港に淀泊した僕はそこで考へたは外でもない折角漫遊するなら一遊で事の足る樣に北海の端れから樺太千島を視察してベーリング海峽を越ね亞米利加へ渡らんと思い愈々決心して根室港より下船して其夜根室の旅館に宿つた久し振りで陸上て寢たのだから未だどうやら船で搖られて居る樣な氣持がする夕食を濟してからそこ等を散歩して九時頃寢に就たが中々眠れそうにない丁度時計が十二時を打つと何處からともなく

「ガーン〳〵」と云ふ鐘の音が聞ゐる耳軟て〻聞いて居ると火事だ〳〵と云ふ聲が聞ゐる僕は内中の人を起してやると皆が飛起て提灯片手に火事場の方へ行つた僕は二階から樣子を見て居ると申々克く燒けてをる町を走つてくる人に火事場はどうかと尋ねたらもう大丈夫だ火事は北風で凍つてしまつた火事わ凍たで安心せいと云つて通つて行く諸君火事の凍た事は未だ始めてでしよう僕は翌日火事場へ行て見たら多くの人夫が跡片附を行てをる山の樣な多きな赤い氷を飛口で割つては車に乘せて引て行く此の赤い氷は皆冬迄しまつて置て酷寒の候に弗々賣出すのだそうな此の氷は溶けると火になつて温いから北海道では冬の寒いときに是を買て喰べるのだそうな僕は氷は冷い者で夏より喰はぬものと思をて居たのだが熱い氷を冬喰ふとは洋行奇談の第一に特筆大書すべきことであると思い茲に是を一寸認して置くのです其の日は一日根室を視察して明日は樺太へ渡ろと思い用意を整へて居ると夕景から雪空に成つて來た二階から市中を見下ろすと向ゐや隣りへ丸竹

が通してある下女を呼で何の爲めに竹が通してあるかと問ふたら今晩雪が降りそーだから明日は表へ出られないに依て隣り近傍へ話しをする爲めに丸竹電話を掛けたのですと云ふていた翌日朝起ると成る程恐ろしい雪が降て居る雪は大屋根迄積もつて外へ一足も出られない向への家はどうかと思い夕べ話しを聞いた丸竹電話の前に立て「ヲイ」と呼んだ向への家からは「ヤヲ早ウ」と返事する僕は大變な雪ですなと云ふたが鳥度も返事がない「モシ〳〵」と呼んでも答へがない暫くするとごろ〳〵と竹の中から何やらが出て來た手に取て見ると氷だこんどは向ふから『今朝は無暗に冷ゐるから聲迄が中で凍つて聞ゐませんだから今突ッ〳〵きましたが出ましたかと尋ねる』ハイ出ました誠に寒いですな『はいさようならと云ふて別れた夫れから僕は聲の氷?を以て來て宿の人に今丸竹電話で話していたら此んな氷が出て來たと見せますと主人は是れを袋へ貯へて置いて夏ねむ氣覺しの藥に使ふと克く治るのだから毎年貯藏して置くのですと云ふ試に其の氷を火の上へ乘せ

たら不思議にも段々溶ける毎に『オハヨー〳〵』『モシ〳〵』と云ふて溶けてしまつた是れを盛夏の頃居眠りする人の鼻の先へぶら下げるとそれは〳〵誠に面白いそうだ何と諸君北海道は火事が凍つたり聲が凍たり想像以外に冷たい所ではありませんか僕は此樣な寒い所を視察して尙も寒い樺太に渡るのです僕が樺太へ渡つて幾多の辛苦困難を爲し將に英領アラスカに渡らんとする船中ベーリング海峽より流れ來る氷山に衝突して乘船は破壞せられ特に頻死の界にありしを米國の遠洋漁業會社の船に助けられ九死に一生を得てやれ嬉しと安心する間もなく本船は海賊に襲はれ海賊と大爭鬪を始めて苦戰惡鬪後の漸〳〵虎口を逃れ亞米利加へ渡り後ち諸國の大都會を視察し歸途亞弗利加の山中に途を踏み迷い黑奴に捕はれ已に斬首に處せられんとせしとき不思議にも神の助けに依りて無事本國に來る事を得し迄尙幾多の譚あれども樺太渡航以後の出來事は後日の出版に讓る事として本書は是れにて筆を止めます諸君幸ひに健全なれ

●不思議の萬年手帳●

此ノ手帳ハ鉛筆ヲ使用セズシテ竹又ハ木切或ハ釘等ニテ書バ文字顯レテ文句ガ不用ニナルカ又ハ他ヘ書附タナレバ此ノ手帳ヲ火ニテ煽レバ直ニ消エテ元ノ新帳トナリマスカラ一冊ノ手帳デ何年デモ使用出來マスシ他ヘ旅行シタトキ鉛筆ナシデ有合セノ揚枝デ、モ書マスカラ至極輕便テ德用ノ手帳デス其他各商店デハ一冊ヲ備ヘテ其日〳〵ノ小口貸附等ヲ控エタリ學生諸君デハ先生カラ聞イタ事ヤ面白イ事ヲ書テ置テ跡デ淸書シタナレバ誠ニ有益デス斯ル便利ノ手帳ガ一冊四錢トハ驚クノ外アリマセン諸君ドシ〳〵買イ玉ヘ

二冊迄郵稅貳錢　此ノ外ニ

●水記萬年草紙●

ト云フ不思議ノ草紙モアリマス

此ノ草紙ハ水デ字ヲ書ケバ明確ニ文字顯レ二十分計リタツト消エテ元ノ通リニナルノデス此ノ草紙ハ墨ヲ使用シマセンカラ衣服モ汚レズ筆モ惡シクナラズ誠ニ實用ト經濟兼備ノ草紙デス此ノ草紙デ習字ヲスレバ皆サンガ字ヲ上手ニ書キナサル樣ニナル事ハ（げんこ）ノ樣ナ判ヲ押シテ保證シマス是レモ一冊タツタ五錢二冊迄郵稅二錢デス此頃ノ學生諸君デ買ハン人ハ一人モアリマセン未ダ買ワナイ人ハ今スグ買玉ヘ

右二品特約希望者ハ返信料附照會セラルベシ

發賣元　三重縣四日市市新丁　弘運館（振替口座大阪七六七三）

264
220

●萬能のり●（一名陶磁器接合劑）

本品ハ如何ナル陶磁器ノ破損物ト雖モ容易ニ接合スルヿヲ得且印號等ヲ入ル、ニ妙而モつぎ目ノ堅固ナルヿ近來未曾有ノ發明品ナリ見本ハ送費共十二錢明細ナル使用法ヲ附ス本品ヲ行商スル人ハ一日ニ二圓以上ノ收入アリ行商人ハ特ニ相談ス

發賣元　三重縣四日市市新丁　弘運館

（振替口座大阪七六七三）

●注意

●御注文品前金ノ外一切御送リ不申候

總テ弊店ヘノ送金ハ振替口座ニ御振込願度切手代用ハ一割増ニ願度候弊店ノ發賣シタル書籍及ビ商品ハ何百年後デモ品切レノ片アリマセンカラ氣ノ附タ時買テ下サイ

明治四十三年八月二日印刷
明治四十三年八月五日發行

不許複製

發行所　三重縣四日市市新丁九十三番屋敷ノ三　弘運館（振替口座大阪七六七三番）

發行者兼印刷者　三重縣四日市市新丁百八十九番屋敷　佐藤溪峰

印刷者　三重縣四日市市新丁二百三十四番屋敷　加藤幸延

印刷所　三重印刷所　電話百十七番

2789

年中無休自宅職業案内

弊店ガ製造發賣スル美術石蠟燭製造機械ハ弊店々主ガ多年苦辛研究ノ結果近世機械學進歩發達ノ許ス限リノ精巧ヲ極メ考案シタル者ニシテ本器ヲ以テ就職セバ老若男女ヲ問ハズ苟モ両手ノ完全ナル人ナレバ一日壹千本以上ノ美術石蠟燭ヲ製造シ得ラルヲ以テ一日慥ニ五十錢以上ノ收利確實ナルヿハ弊店ガ拳大ノ認メヲ以テ保証仕候世ノ殖産工業ニ志アルノ士ハ速ニ着手實行セラレンヿヲ希望ス尚各自ノ製出セラレタル蠟燭ハ弊店ニ於テ買受ノ契約ヲ爲ス

●就業希望者返信料五錢封入申込ルベシ

●就業案内書及ビ見本ヲ送ル

佐藤式美術石蠟燭製造器械
日勝蠟燭製造並ニ
蠟燭原料一式
パラビン販賣業

三重縣四日市市新丁

佐藤彌一郎商店

（振替口座大阪七六七三）